

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 23 日現在

機関番号：14503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17401

研究課題名(和文) 昭和戦前期における<歴史教育>言説の生成と「学知」の構築過程に関する分析的研究

研究課題名(英文) The Generation of "History Education" Discourse and the Construction Process of "Knowledge" Before the Second World War Based on Discourse Analysis of Normal University Course "History Education"

研究代表者

福田 喜彦 (FUKUDA, YOSHIHIKO)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：30510888

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、昭和戦前期に活躍した歴史教師たちが歴史教育に関する「言説」をどのように生成しながら、歴史教育の「学知」を構築していったのかを解明するために、建文館が刊行した『師範大学講座歴史教育』(全14集)と各種歴史教育雑誌を主な分析対象にして検討した。本研究によって、初等教育で国史科を担当した歴史教師らが生成した<歴史教育>言説とは何かを確定し、歴史教育に関する「学知」がどのように形成され、初等教員の資質形成に果たした意味が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this study, the history teachers who were active in the first semester of Showa era generated "discourse" on the history Education, "Normal University course History education" published by KenbunKan in order to elucidate whether it was built "knowledge of the Science of History Education" (All 14 collections) and various historical education magazines were considered to be the main subjects of analysis. As a result, the history teachers who took charge of the consideration textbooks in primary education were created, and the historical education > What is discourse? The meaning that "learning knowledge" about the history education was formed, and the quality formation of the elementary teacher became clear.

研究分野：社会科教育学

キーワード：昭和戦前期 歴史教育 言説 学知 歴史教育雑誌 初等教育 中等教育 歴史教師

1. 研究開始当初の背景

これまで申請者は、歴史教育雑誌の分析から昭和戦前期の歴史教育の理論と実践を考察してきた。まず、平成20・21年度科学研究費補助金若手研究(スタートアップ)の交付を受け、昭和戦前期の高等師範学校附属小学校の歴史教育実践を「説話」「理解」「作業」「合科」の4つの視点で類型化し、歴史授業の特色を明らかにした。

次に、平成23～25年度科学研究費補助金若手研究(B)の交付を受け、昭和戦前期の歴史教育情報メディアにおける学知の体系化を図ってきた。

そこで、本研究では、これまでの研究成果を発展させ、昭和戦前期における<歴史教育>言説の生成と「学知」の構築過程を解明することを目的とした。

近年、教育雑誌に着目した研究が戦前教育学の分野で積極的に展開されている点が本研究の学術的背景としてあげられる。例えば、先駆的な研究では、文部省教員検定試験と戦前教育学を分析した寺崎昌男らの研究があり(寺崎昌男・「文検」研究会編『「文検」の研究』学文社、1997年)、この「文検」の研究は、戦前の中等教員に期待された専門的知識や教職教養を各教科の試験問題から分析する形に発展している(寺崎昌男・「文検」研究会『「文検」試験問題の研究』学文社、2003年)。特に、「文検」の研究では、戦前期に刊行された「文検」のための受験雑誌に掲載された試験問題の分析から中等教員に求められた学知を明らかにしている点が注目される。また、近代日本教育雑誌にみる情報の研究として梶山雅文らは、中央・地方の教育会の雑誌を分析している。梶山らは、明治期から昭和戦前期を対象として、教育雑誌を通じて教育情報回路がいかんにか形成されていったのかを実証的に明らかにしている(梶山雅文編『近代日本教育会史研究』学術出版会、2007年及び『続・近代日本教育会史研究』学術出版会、2010年)。ここでは、書誌的研究に留まらず、教育情報回路がいかんにか構築されたのかを教育雑誌から考察している点に特徴がある。

上記の先行研究では、教育雑誌というメディアによってもたらされた情報を「文検」「学校」「教育会」などを鍵概念として、読み解くことで戦前教育学を重層的に描き出している。しかし、社会科教育学の分野ではこれらの教育雑誌を分析対象とする研究は十分ではない。そこで、本研究では、昭和戦前期に刊行された歴史教育を専門とする教育雑誌を対象として分析を進めていった。

2. 研究の目的

本研究の到達目標は、建文館から刊行された『師範大学講座歴史教育』(全14集)や各種の歴史教雑誌を主な分析対象として、以下

の3点を3年間の研究期間内に明らかにすることである。

①初等教育で国史科を担当する教師たちが生成した<歴史教育>言説とは何かを確定する。

②当時の初等国史教育界で影響を与えた人物の相関関係やその全体像を総合的に把握する。

③歴史教育に関する「学知」の構築過程から初等教員の資質形成に果たした意味を解明する。

このように本研究の到達目標は、<歴史教育>言説の生成と「学知」の構築過程を検討することで、昭和戦前期の歴史教育の歴史的な意義と特質を新たな視点で重層的に解明していく点にある。

さらに、本研究では、昭和戦前期に国史科を担当した初等教員が歴史の授業実践のためにどのような<歴史教育>言説を生成していたのかを検証する上で、『師範大学講座歴史教育』と各種歴史教育雑誌を重要な史料と位置づけ分析を行った。

本研究の学術的な特色は、初等教育で国史科を担当した歴史教師らが生成した<歴史教育>言説とは何かを確定することで、歴史教育に関する「学知」がどのように形成され、初等教員の資質形成に果たした意味を明確にできる点である。また、従来の研究で解明されていなかった昭和戦前期の歴史教育に関わる人物に焦点を当て、学際的な分野から提供された歴史教育に関する「学知」が教師に与えた影響を検証できる点が独創的である。

3. 研究の方法

本研究では、昭和戦前期における<歴史教育>言説の生成と「学知」の構築過程を解明するために、昭和戦前期に発刊された歴史教育雑誌とその刊行物を対象に分析する。

これまで申請者は、昭和戦前期の歴史教育雑誌のデータベース化に取り組んできた。また、これらの史料をもとに、初等教育における具体的な授業実践のレベルでの分析も進めてきた。しかし、歴史教育の理論と実践の背景となる「学知」と<歴史教育>言説がどのような関係にあったのかという課題が残されている。そこで、本研究では、歴史教育雑誌から発信された歴史教育に関する「学知」が初等教育における理論や実践に与えた影響を次の手順で検討する。①『師範大学講座歴史教育』(全14集)や各種の歴史教育雑誌の論考をデータベース化する。②昭和戦前期に刊行された歴史教育雑誌で生成された<歴史教育>言説を「専門的学知」「理論的学知」「実践的学知」の3つの視点から分析する。③①・②をもとに、<歴史教育>言説の生成と「学知」の構築過程を明らかにする。

①では、田中寛一・中山久四郎・有高巖らが刊行した『師範大学講座歴史教育』(全14

集)を分析する。1940年から出版された『師範大学講座歴史教育』は、帝国大学や高等師範学校の教授をはじめとして国史学、東洋史学、西洋史学などの歴史学研究を基礎に広範囲にわたる学問分野の研究者が執筆していた。また、歴史教育に関する理論や実践に関しても、高等師範学校の教授や師範学校・中学校の教諭らが担当し、歴史教育の最新の知見を提供していた。各巻は、「専門的学知」「理論的学知」「実践的学知」の3つの領域から昭和戦前期における歴史教育の理論と実践を総合的に把握できるように構成されていた。このように『師範大学講座歴史教育』の論考を分析することで、学際的な学問分野から提供された歴史教育に関する「学知」が初等教育に関わる歴史教師らに与えた影響を検証することができる。

②では、『歴史教育講座』(全14集)、『実践国史教育体系』(全10巻)を分析する。昭和戦前期に歴史学界や国史教育界を中心とする研究者や訓導らで執筆された歴史教育雑誌を見てみると、東京高等師範学校や広島高等師範学校を中心とした歴史学や教育学などを専門とする専門的な研究者と東京高等師範学校附属小学校、広島高等師範学校附属小学校、東京女子高等師範学校附属小学校、奈良女子高等師範学校附属小学校といった高等師範学校附属小学校の訓導を中心とした歴史教育実践家が「学知」の形成に関わっており、先述した『師範大学講座歴史教育』と重複する執筆者も見られる。したがって、これらの比較・分析から当時の初等国史教育界で活躍していた人物の相関関係がどのようなものであったのか、その全体像を包括的に把握することができる。

③では、『師範大学講座歴史教育』や各種の歴史教育雑誌の分析から歴史学をはじめとする専門的な研究者提供された歴史教育に関する「専門的学知」が、国史科を担当した初等教育の訓導たちによって、「理論的学知」から「実践的学知」へと再構築されていた過程を明らかにできる。

4. 研究成果

平成27年度は、『師範大学歴史教育』(全14集)の分析を行った。まず、本講座の全14集の執筆者と冊子をデータベース化した。本講座は、各集ごとに「専門的学知」「理論的学知」「実践的学知」の3つの学知で構成されている。つぎに、これまでの研究で史料収集を進めてきた『歴史教育講座』や『実践国史教育体系』などの歴史教育雑誌も含めて分析することで、初等教員に求められた歴史教育に関する「学知」と「歴史教育」言説の関係性を考察する基礎的な作業を行った。それによって、「歴史学」と「歴史教育」の接点から国史科を担当した初等教員にどのような時代像が求められていたのかを把握し、歴史授業に取り組むための教材研究のビジ

ョンを考察することができた。特に、本年度は、「専門的学知」を取り上げてデータベース化した。「専門的学知」には、各時代を専門とする代表的な歴史学者が執筆を担当している。具体的な執筆項目を見てみると、「東洋古代史」「日本現代史」「西洋中世史」「満州史」「朝鮮史」「西域史」「東洋現代史」などが執筆されていた。

また、『師範大学講座歴史教育』では、「歴史学」による学知だけでなく、考古学や民俗学、宗教学、哲学といった他の分野の学者たちも学知を提供していた。例えば、「日本仏教史」「日本民俗史」「日本芸能史」「東洋美術史」「日本経済史」「日本思想史」などが執筆されていた。

こうした分析をもとに、『師範大学講座歴史教育』では、「歴史学」による学知だけでなく、考古学や民俗学、宗教学、哲学といった他の分野の学者たちも学知を提供していたことが明らかとなった。

平成28年度は、前年度に加えて『歴史教育講座』(全14集)を分析するとともに、『実践国史教育体系』(全10巻)の分析も行った。これらの分析を通して、昭和戦前期の歴史教育の理論的な学知の総合化を図った。

ここでの分析視点は、①歴史教師に求める資質や能力をどのように考えていたのか、②国内外の歴史教育に関する動向をどのように捉えていたのか、③歴史学習への心理学的なアプローチや成績評価をどのように考えていたのか、④歴史教育の理論を支えていた学術的な背景は何だったのか、⑤歴史教育を行う学校の教育環境はどのようなものであったのか、⑥歴史教育で「女子教育」や「郷土史」といった時事問題的な教材をどのように取り扱っていたのかなどの視点である。

これらの課題を検討するために、『師範大学講座歴史教育』とともに、『歴史教育講座』や『実践国史教育体系』の関連する刊行物も含めて比較・考察を進めた。

例えば、高橋俊乗(京都帝国大学講師)『教育思潮と国史教育(第2巻)』、石山脩平(東京高等師範学校教授)『国史教育と解釈学(第3巻)』、丸山良二(東京高等師範学校講師)『国史学習の心理(第4巻)』など歴史教育の理論書を分析することで、上記の①から⑥の課題を検討した。

具体的な執筆項目を見てみると、「支那事変と歴史教育」「最近の教育思潮と歴史教育」「師範学校の歴史教育」「歴史観及び国史教育の原理」「歴史教師論」「神代史と歴史教育」「女子教育史と歴史教育」「歴史教育概論」「国民学校の歴史教育」などが執筆されていたことがわかった。

平成29年度は、前年度に続いて『歴史教育講座』(全14集)を分析するとともに、実践的な学知の創出と形成の過程に焦点を当てて、『実践国史教育体系』(全10巻)の分析を行い、学問的な成果がどのように歴史授業として教材化されていたのかを検討し

た。

「実践的学知」には、帝国大学や高等師範学校の教授たちが執筆した「歴史教育関係教材」と高等師範学校附属小学校の訓導や中学校の教諭たちが執筆した「標準小学国史指導案」の2つがまとめられていた。

具体的な執筆項目を見てみると、「歴史教授法概論」「歴史の新指導法と其の機構」「国民精神関係教材」「思想史宗教史関係教材」「社会史経済史関係教材」「外来文化及内鮮関係教材」「歴史考査法」「郷土史指導上の諸問題」などが執筆されていた。

また、「標準小学国史指導案」の各学年の各課ごとの「題材」「要旨」「教材観」「実践指導」「準備」「時間配当及び区分」といった項目を分析した。「標準小学国史指導案」には、「教材配当表」が示され、尋常科5・6年生と高等科1・2年生向けに月毎の「指導案」が提供されていた。

さらに、高等師範学校附属小学校の訓導らが執筆した『実践国史教育体系』を通じて、「専門的学知」と「理論的学知」が統合され、③歴史教育の実践的な指導法がどのように展開されたのかを検討した。

具体的には、大松庄太郎(奈良女子高等師範学校訓導)『国史教育の学年的発展(第5巻)』、小島貞三(奈良女子高等師範学校訓導)、『国史教科書挿画の精神と指導(第8巻)』、大久保馨(広島高等師範学校訓導)『国史教育と指導過程(第6巻)』、桜井勝三(東京女子高等師範学校訓導)『国史教材の類型と其指導(第7巻)』、宮腰他一雄(東京高等師範学校訓導)『国史教育実践諸問題I(第9巻)』などを『師範大学講座歴史教育』や『歴史教育講座』と合わせて考察した。

こうした成果を踏まえ、高等師範学校附属小学校の訓導らが執筆した『実践国史教育体系』を通じて、「専門的学知」と「理論的学知」が統合され、歴史教育の実践的な指導法が展開されていたことが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

福田喜彦「昭和戦前期における<歴史教育>言説の生成と「学知」の構築過程—師範大学講座『歴史教育』の言説分析をもとにして—」『兵庫教育大学研究紀要』第51号, 2017年, 15-28頁。

福田喜彦「昭和戦前期における「調べる綴り方」の理論と実践—綴り方倶楽部臨時特輯号『調べる綴り方の理論と指導実践工作』をもとにして—」『日本社会科教育学会全国研究大会発表論文集』第13号, 2017年, 54-55頁。

福田喜彦「昭和戦前期における<歴史教育>言説の生成と「学知」の構築過程」『日本社

会科教育学会全国研究大会発表論文集』第12号, 2016年, 214-215頁。

福田喜彦「日韓共通歴史教材で考える「高大連携」による歴史授業」『歴史地理教育』第840号, 2015年, 52-57頁。

[学会発表](計 2 件)

福田喜彦「昭和戦前期における「調べる綴り方」の理論と実践—綴り方倶楽部臨時特輯号『調べる綴り方の理論と指導実践工作』をもとにして—」日本社会科教育学会第67回全国研究大会, 2017年9月16日, 千葉大学。
福田喜彦「昭和戦前期における<歴史教育>言説の生成と「学知」の構築過程」日本社会科教育学会第66回全国研究大会, 2016年11月5日, 弘前大学。

[図書](計 1 件)

原田智仁編『社会科教育のルネサンス—実践知を求めて—』保育出版社, 2016年, 全202頁。

[産業財産権]

○出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福田喜彦 (FUKUDA YOSHIHIKO)
兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号: 30510888

(2) 研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし